

# やぶれ傘



一一二二号  
二〇二一年十月

風の寄る紫苑の丈となりけり 根橋安次  
 とぶ川にちろちろ落つる秋の水 大島英昭  
 二百十日棚に逆さの広辞苑 きくちきみえ  
 いつの間にか故人を想ひみる残暑 井久保 勲  
 銀杏の青き実が落つ頃となり 白石正躬  
 コスモスに園児の帽子見え隠れ 廣瀬雅男  
 九月ゆく白髪と爪がよく伸びて 藤井美晴  
 虫時雨ひと近づくと点くライト 瀬島酒望  
 ガードレールに雨跡残る茨の実 天野美登里  
 炎昼のだから坂をだらだらと 青谷小枝  
 スーパーの倉庫に明かり鈍印 小山よる  
 落し文耳をよせれば音のする 有賀昌子  
 石仏が石屋の前に秋の蝶 渡邊孝彦  
 虚栗とんと蹴られて裏返る 安藤久美子  
 稲妻を背にして涙を下りけり 秋山信行

## 抄 集 句 傘 紀 大 崎 夫 選

向日葵にじつと見られてゐるやうな 浅嶋 肇  
 転げ落つ利那翅出すてんとむし 石塚清文  
 真つ直ぐな北海道の夏の道 泉 一九  
 白玉を茹でる電話が鳴つてゐて 木村瑞枝  
 畳屋に畳のにほひ涼新た 倉澤節子  
 座せばすぐ膝へ猫のる夜の秋 小泉里香  
 新盆の兄の写真は本棚に 佐藤稲子  
 雲の峰塗り直されし二の鳥居 柴崎和男  
 秋の雨ポールベン置き外を見る 高橋宜治  
 折り紙の襟を合はせる夜の秋 中島和子  
 桐一葉土蔵の木舞あらはなり 萩原漢人  
 蓮の実の弾けて寺の庭静か 橋本美代  
 秋風を窓より入れて風呂介助 日高みち子  
 桔梗や沢にさはさは俄雨 箕田健夫  
 鉛筆を削り揃へて朝涼し 山本久枝

足一本おいてががんぼ飛んでゆく  
吉田幸恵  
白桃のコンポートのる江戸切子  
夕焼けに少し遅れて風の来て  
青柿の落ちる木陰で立ち話  
花野から風の来てゐるログハウス  
銀やんますいと近寄りつと離れ  
涼新たな図書館で本二冊借り

浅嶋肇

卓上の紙撒き散らす扇風機  
枕一つ畳に投げて昼寝かな  
夏帽の少女のお辞儀行儀よく  
向日葵にじつと見られてゐるやうな  
朝餉三河湾の民宿には今朝釣り来たる鱧とべら  
夏帽を脱ぎ禿頭を笑ひ合ふ  
農道は花野の中へ消え行ける

石塚清文

転げ落つ刹那翅出すてんとむし  
子供らの得意げな顔かぶと虫  
骨董屋備前の壺に赤のまま  
佇みて路傍の闇にちちる聞く  
おしろいの花を飛ばしてみたりして  
看板に灯蛾の群がるラーメン屋  
野の道は曲がり曲がりて吾亦紅

石原健二

電柱の影にバス待つ夏真昼  
裏庭の木々に風ある夏座敷  
片陰に子連れの母と老夫婦  
日がさせばどつと鳴きだす油蟬  
バサときてパツと飛び去る稲雀  
芋の葉に当たたる雨粒玉となり  
夏草はそのまま伸びて背丈超え

知床の浜茄子の花見て帰る  
 真つ直ぐな北海道の夏の道  
 柿の種ポリポリ食つてみて雷雨  
 甚平を着て甚平の人となり  
 熱川の駅前広場カンナ咲く  
 長袖の袖をまくつて行く花野  
 胡麻煎餅すこし湿気てる夏の果

泉 一九

伊藤 薫

ぬか漬けに白瓜のある夕膳  
 朝食は西瓜二切れ塩を振り  
 今日にはまたやけに大きな蟬の声  
 盆踊り知つてる曲で輪に入り  
 集読みかけの本裏返し梨を剥く  
 うたた寝の猫の頭に秋の蠅  
 生協のメールに踊る「秋刀魚」の字

岩藤 礼子

横書きの句を読むことに慣れて秋  
 盆荒れの空にカコウと鳴く烏  
 露草は空の青きに咲いてこそ  
 終るかと思れば朝顔また咲いて  
 するすると茎伸びて咲く曼珠沙華  
 木屋の香の入りに来る自動ドア  
 路地の角また路地の角百日紅

江口 恵子

貝殻で作る動物夏休み  
 炎昼の畑に人の影ふたつ  
 駄菓子屋へ駆けて行く子ら夏の空  
 浴衣着てゆつくり歩く女学生  
 横書きの丸文字残暑見舞来る  
 古代米の稲穂のオート風に揺れる  
 何色と言へぬ夕焼けの下をり

枝みや子

雨近く草刈り後のなほ匂ふ  
朝露が足元濡らす田んぼ道  
早朝に咲きそろひたる曼殊沙華  
雨あとの雨粒光る彼岸花  
木犀の香が図書館をつつみぬる  
木犀の香が図書館をつつみぬる  
ペランダの猫は腹見せ天高し

奥田温子

返信はいつもの切手夏休み  
門送りの列黒々と片陰に  
日陰ればひとしほ高き蟬の声  
子かまきりもう親指の長さほど  
幹を這ふりの思はぬ速さかな  
さあ来たぞ庭の高木に赤とんぼ  
校庭に木犀五本雨あがる

神山市実

いただきし茄子と胡瓜を浅漬に  
打ち水にかなへび二匹顔を出す  
梅雨明けの窓を大きく開け放つ  
小窓より吹き込む風のひやひやと  
葉の先の光る一粒露涼し  
風鈴の音の交り合ふ曲がり角  
ゆるやかな坂の向うに雲の峰

亀岡睦子

俄雨紫陽花揺れて揺れ止まず  
車椅子ラグビーに手に汗握り  
仙人掌の花一夜をしかと咲きにけり  
台風過庭に小さな水溜り  
窓際にすすきを飾り客を待つ  
風少し草から草へバツタ飛ぶ  
木瓜の木にリンゴのやうな実が五つ

暮るるころちよつぴり多く胡瓜もむ  
白玉を茹でる電話が鳴つてゐて  
鷺草に風の来てゐる日暮れどき  
茄子を焼く遅き昼餉に三四本  
秋ともし机に赤きガラスペン  
昼過ぎに二回目かける芋水車  
旅の中虫鬼灯が残されて

木村瑞枝

畳屋に畳のほひ涼新た  
秋湿り腕絞めつける血圧計  
刃を入られる二十世紀といふ梨に  
夕風がはなれてふれて吾亦紅  
柵は朽ち水引草の乱れ咲く  
刀豆は仰ぐ高さにちぎれ雲  
野紺菊道の岐れに石置かれ

倉澤節子

秋茄子の支柱を直しゐる人が  
道端に咲くミゾハギに雨は降り  
木茸の実の間道行き止る  
スカシユリ母在りし日を偲びけり  
この秋は数字少なき万歩計  
おほかたはとり残されし秋の茄子  
ひと叢の曼珠沙華咲く田んぼ道

黒澤次郎

小流れの川面を覆ふ藪枯らし  
紫蘇の実の香りの残る掌  
捕らへたる柚子坊にある蜜柑の香  
静けさを弥増してゆく鉦叩  
道ゆくやをちこちに咲く曼珠沙華  
天高き日はともかくも栗ご飯  
ちぎりては揺らしてみせる猫じやし

小池一司

◇ 11月・12月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
11月	2日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	2日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	3日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	辻久保 勲
	5日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	5日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	20日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	27日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	27日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
12月	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	武蔵浦和コミセン	秋山信行
	6日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン4	辻久保 勲
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	18日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	19日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	辻久保 勲
	25日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	25日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

(注) ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

12月19日(日)の吟行。集合 10時。JR北浦和駅改札口。

吟行地 さいたま市・見沼。通船場と芝川土手。

句会場 武蔵浦和コミセン・第2集会室

重 街 夕 驟 蕎 夏  
 た る 顔 雨 麦 木  
 げ や 淡 去 を 立  
 に か く 武 ち 抜  
 赤 道 灯 原 友 け  
 き 曲 り は ン の て  
 下 が り 白 ン 振 風  
 弦 り 白 の ン る 風  
 の ゆ 粉 の ス 舞 風  
 の き 花 句 の 舞 風  
 の 秋 花 集 の 開 舞 風  
 の 墓 真 句 集 の 開 舞 風  
 の 地 白 真 句 集 の 開 舞 風

ブ 月 鶏 う 座 へ 西  
 イ 白 頭 つ せ ッ 日  
 ブ の の す ば ド 中  
 イ 自 そ ら す ホ 袖  
 と 転 ば と ぐ は ま  
 鬼 車 に 続 膝 づ く  
 灯 き 自 く へ し り  
 の い 販 轍 猫 の し す  
 笛 と 機 と ほ る ぼ 塾  
 な と 機 と ほ る ぼ 塾  
 り ま り 酒 草 夜 の 夕 講  
 に け け 屋 草 秋 の 虹 師  
 り け け 屋 草 秋 の 虹 師

小 卷 若 菜  
 小 泉 量 香

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733  
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870  
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 辻久保 勲 ☎048-853-3856